

- ◆ キャベツの春どり栽培 ～直売所における定番野菜の出荷期間拡大～
- ◆ サヤインゲン（つるあり）の抑制栽培 ～施設利用による作期の拡大～
- ◆ トマト黄化葉巻病発生にご注意を！ ～今一度、防除対策の再点検を～
- ◆ 電撃殺虫器の床置きによるサシバエ防除 ～ちょっとした工夫で効果アップ～
- ◆ 夏まきハウレンソウのトンネル栽培 ～展示圃の結果と栽培上の留意点～
- ◆ 農業用水路の多様な役割をPR ～田んぼの生きもの調査から～
- ◆ ーロメモ：ブルーベリー加工品の安定生産に向けて
- ◆ ーロメモ：ロゴマークで青梅市農業PRに一役！



中央農業改良
普及センター

キャベツの春どり栽培

～直売所における定番野菜の出荷期間拡大～

管内の多くの区市に農産物直売所が整備されていますが、どの直売所も8～9月と3～4月が品薄となりがちです。特に4月は、月別売上額が大幅に減少する例も見られます。

そこで、普及センターでは年間を通じて安定した需要のあるキャベツについて、作期拡大に向けた春どり栽培の検討を行いました。

作型および品種の選択

現在の管内におけるキャベツ栽培の中心は、秋冬どり（11月収穫）と初夏どり（6月収穫）です。そこで、春の収穫を狙い、耐寒性と低温結球性をもつ中晩生種の「彩音（あやね）」（タキイ種苗）を、JA東京みどり管内の複数の圃場で、実用性の確認を行いました（図）。

展示圃の概要と結果

播種は8月上中旬に行いましたが、猛暑や台風等の影響で定植時期が9月中下旬とやや遅れ気味になりました。定植直後はコナガやアオムシ防除のために1～3回の農薬散布を行いました。11月以降は全く防除の必要はありませんでした。また、凍害や鳥害は、今回は発生しませんでした。

収穫適期は3月上旬～4月中旬と、最も品薄になる時期に出荷することができました。

彩音の球型は扁平球で、しまりも良く、1.0～1.5kgとなりました（写真）。

在圃性もあり、1ヶ月以上に渡って出荷可能でした。食味も良く、十分な商品性を備えていました。



写真 収穫適期を迎えた「彩音」

栽培管理のポイント

近年、キャベツの育苗は、従来の地床育苗にかわり、管理しやすいセル育苗が増えています。この作型では育苗期が高温となることから、セル育苗の場合、晴天日は1日2～3回、曇り日でも最低1日1回の灌水が不可欠です。

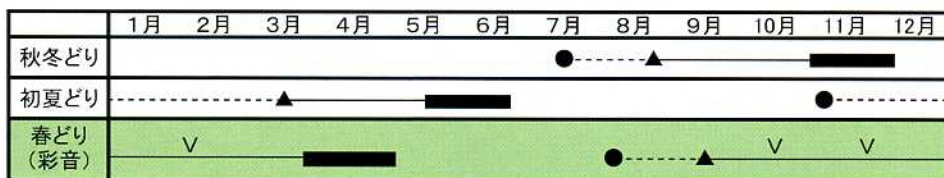
施肥管理に関しては、本圃での栽培期間が長くなるため、基肥を少なめにし、追肥を3回程度に分けて施すのがポイントです。

害虫に関しては、ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）の多発期となるため、育苗方法に関わらず、育苗中は防虫ネットで被覆します。加えて、地床育苗中や本圃への定植時には粒剤の施用が効果的です。一方、セル育苗では、育苗トレイに灌注するタイプの殺虫剤があり、省力的に防除できます。

病害は少ない時期ですが、早春に雨が多くの場合には菌核病に注意します。

今後に向けて

普及センターでは、今後も主要野菜の作期拡大に向け、有望品目の選定や作型の検討を行い、情報提供に努めていきます。



●播種 ▲定植 ■収穫 V追肥

図 都内におけるキャベツの主な作型と中晩生種の栽培事例

中央農業改良
普及センター

サヤインゲン(つるあり)の 抑制栽培

～施設利用による作期の拡大～

都内の野菜生産については、農産物直売所やインショップなどへの出荷が年々増加しています。このため、生産者からは端境期を埋める有望野菜の情報が求められています。

そこで、普及センターでは施設トマト等の後作に、通常、露地栽培(6～7月出荷)が主であるサヤインゲンを導入し、作期拡大(10～11月出荷)に向けた実証展示を行いました。

栽培管理の概要

品種は、食味が良いとされる「いちず」(カネコ種苗)、「王湖」(サカタのタネ)を供試しました。ハウス内に黒マルチ(9235)、間口1.6mのトンネル型ネット支柱を敷設し、8月7日にネット支柱内側に35cm間隔で直播きしました。しかし、高温の影響と思われる発芽不良が見られ、10日後に追い播きしました。この時期の播種は、こうした障害を避けるためポット播きし、初生葉展開時に定植する方が安全です。

その後、8月20日から遮光・遮熱シート(遮光率約35%)を9月中旬頃まで展張しました(写真)。



写真 トンネル型ネット支柱及び遮光シート

収穫期間と収量、販売金額

開花は、「いちず」が播種36日後、「王湖」は播種38日後となりましたが、「いちず」には高温の影響と思われる花ぶるいが見られました。

「いちず」の収穫期間は10/11～11/27、収量

は153kg/a、良品率80%、収量の58%が11月の収穫となりました。一方、「王湖」の収穫期間は10/1～11/27、収量は123kg/a、良品率73%、収量の57%が10月となりました(図)。

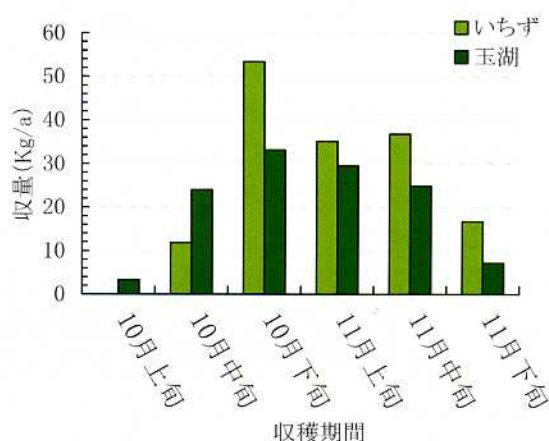


図 抑制サヤインゲンの収量

本実証での1a当たりの収量は「いちず」が「王湖」に比べ、2割以上の増収となりましたが、販売額は10月上中旬の市況が高めに推移したため、同程度となりました。これらのことから、本作型では収量の多い「いちず」を用い、遮光資材等を利用して花ぶるいを抑え、10月上旬から安定した収量を確保することが重要と思われました。

病害虫の防除

この時期は、特に目立った病害はありませんでしたが、生育初期からマメハモグリバエの被害が見られ、防除が必要でした。また、ハダニ類が8月から、オオタバコガによる幼莢の被害が8月下旬～11月に見られました。

今後の活用

播種時から生育初期の高温対策には注意が必要ですが、夏秋期のサヤインゲン人気は高く本作型の有望性を確認することができました。直売所の品揃えの充実に向け、サヤインゲンの作期拡大を目指してはいかがでしょうか？

西多摩農業改良
普及センター

トマト黄化葉巻病にご注意を!

～今一度、防除対策の再点検を～

トマト黄化葉巻病被害が増加!

この病気は、東京都では平成18年に発生が見つかりました。その後は生産者の皆さんの努力により、発生拡大が抑えられていました。

しかし西多摩地域では、昨年8月定植の抑制トマト栽培施設において、黄化葉巻病が発生しました。一部の施設では被害がひどく、予定よりも早く収穫を取り止める事態になりました。

そのため、普及センターでは、施設における防除対策の再確認を行う取組をしています。

トマト黄化葉巻病とは?

タバココナジラミにより媒介されるウイルス病です。潜伏期間(感染～発病)は7～20日とされています。初期症状は、新葉の縁から退色し、葉が巻き、萎縮します。発病以降に伸長する莖葉は、節間が短くなり、脇芽は叢生(そうせい)して、全体に黄化萎縮します。発病後に咲く花は結実しません。苗で感染すると生育が止まり、その後ほとんど伸長しません(写真)。



写真 平成23年の黄化葉巻病発症状況

どのように感染するのか?

タバココナジラミ(幼虫～成虫)が、感染株を吸汁しウイルスを体内に取り入れ、次の株を吸汁することで伝染します。土壌伝染、種子伝染、管理作業による接触では伝染しません。

タバココナジラミは、露地で4～11月に発生します。特に7～9月は個体数が急増します。施設では高温期(作物がない時期)を除き、通年発生します。

タバココナジラミはどんな虫か?

成虫は体長0.8mmのとても小さな害虫で、年間4～5回の発生を繰り返します。

高温に弱く、成虫は40℃で5～24時間、50℃・30分間、幼虫は45℃・12時間、50℃・5時間、蛹は50℃・7時間で死滅するといわれています。

感染を防ぐために!

トマト栽培施設にタバココナジラミを「入れない」「増やさない」「出さない」を徹底します。

①入れない: 施設は近紫外線(UV)除去フィルムを張り、開口部は0.4mm防虫ネットで被覆します。高温期は換気対策に注意します。施設内外の除草を徹底して、発生源をなくします。

②増やさない: 育苗期、定植期は粒剤を使用して防除を図ります。黄色粘着板を苗床や栽培施設に設置して、発生を監視し、早期に発見して、発生初期の防除を徹底します。

③出さない: 発病株は直ちに抜き取り、放置せず土中に埋めるか、袋に詰めて圃場外へ持ち出します。暑い時期は栽培終了直後のトマトを誘引したまま抜根して、直ぐにハウスを閉め切り蒸しこみます。トマトが完全に枯死するまで7日以上処理を続けます。除草もあわせて行い、タバココナジラミが生き残る場所をなくします。

いま一度、防除対策の再点検を!

普及センターでは、黄色粘着板によるタバココナジラミの発生状況や効果的なローテーション防除、薬剤の検討、防虫ネットの普及に取り組めます。皆さんの施設でも防除対策を見直し、トマトの生産向上を図りましょう。

